

## 特集 2 リゾート開発における諸問題

# リゾート開発と生物の保全

宮崎大学名誉教授 中 島 茂

### はじめに

今や地平線に入道雲が現れたように、リゾート法の出現があって、かつての関係する諸法規が色褪せんとしている。このとき、関係者は視野を一段と拡大し、さらに「古きを尋ねて、新しきを知る」の思いを新しい国造りの縁としたい。それにつけても、同じ地上に生を受けた自然界の生物生活はどのようになっていくことかと案ぜずにおられない。

### I 外地におけるリゾート開発

#### 1. エローストン公園 (アメリカ中央・昭和39・8月調査)

国立公園のなかでスケールが雄大であると共に関節温泉をもって特徴づけている。植生は温泉地帯を除いては豊と云える。動物はクマ公園の別名さえあるように、多数が棲息していて道路に出て旅人に食をもとめ、車を止める。部落の入口にはオオジカの角で築いたアーチを見る程に鹿類も多い、所々の湖ではキャンプカーによるマス釣り客も訪れて、自然と共存する人の世をうかがえる。

#### 2. ヨセミテ公園 (アメリカ東部・昭和48・7月調査)

この大渓谷は国土保全と水源涵養の大役を全うしている。従って文化人への呼びかけが強い、まず山は紫に深く、その山腹に飛瀑がかかる、林木は豊に成長し、かつては馬車で幹を通り抜ける名大木の存在さえあった程で

ある。宿舎は大形ホテルよりヒュッテ型で庭先には野鳥が群る。水流ではまたボートによる森林浴が楽しまれ、家族的のリゾート地となっている。

#### 3. リオデジャネーロ (ブラジル北東部・昭和48・8月調査)

茲はかつて、ポルトガルの支配下にあった頃のブラジルの都として開発された。その史跡は建造物、街路樹のたたずまいから伺われる。市街の北方山頂に建つコルコバードは異彩をはなっている。市内の公園や山腹地帯に鳥類・昆虫類が多いのは古く栽植された豊かな植生によるところが多い。その中でもジャノメチョウ仲間の88一蝶は後翅に88字型の紋が明瞭なので多獲され、現在は採集も許可制となっている。気温は8月でもかなり低下するがマンゴーは豊に結実して旅人を喜ばせていた。

#### 4. イグワスの滝 (ブラジル南部・昭和48・8月調査)

この滝は複合滝でその滝口の幅を合わせると実に世界最大と言える、ブラジルの黄土地帯を通り抜けているので滝水は年中黄濁するものの一大壮観である。ことに、サンパウロ発イグワス観光の小型航空機によれば滝上を丹念に旋回サービスを行うのでしたたか撮影には便ずるが子供・婦人の観光者には肝を冷やされる。この滝を囲む森林帯には巨木は少ないが夏には国花イッペイの花咲く小路をか

かえて広大な緑のカーテンに取囲まれ異色の景観を呈する。周囲の樹幹には日中数多くの昆虫が休息し、かれらの翅は滝よりの霧雨で重くぬれているので飛翔が困難となり、素手で捕獲できる程である。依って採集禁止区とするが当然である。因に当地産の蝶細工品の蝶は他地産の品であり、殊に金属的な異彩を放つモルホ蝶などは幼虫・蛹を飼育保護し、羽化した新鮮の蝶を利用している。滝に近接する宿舎等は今後、無定見開発の波に乗せればこの大自然の景観は該地の生物と共に滅び失せるのである。

#### 5. アテネ (ギリシャ南部・昭和63・12月調査)

この暮の12月8日に24年振りに訪ねた、アクロポリス神殿はユネスコ協会の援助をえ目下修築の最中であつた。高い神殿の丘より見おろす脚下には古代そのままの野外劇場の大円階段が見えて、まさに旧友に相まみえての思いでなつかしい限りであつた。オリンピックのグラウンドは新装に変わって、発祥地面目を留めているが、市街地の街路樹は手入れがとどきかねていて寒むぎむの風情であつた。

#### 6. イスタンブール (トルコ西部・昭和63・12月調査)

トルコの変転の歴史を率直に感得するのはこの地への足跡にしくものはない。一條の川を以てヨーロッパとアジアに境し、その流れの橋は一つはイギリスの技術に依り、一つは日本に依ると言う如くで、まさに国際的の舞台であるところは今昔に変わりがなく、かつての宮殿は神殿に装い、現には博物館と変わり、過ぎし日の王侯の栄華は館内で瞬いているとも言える。

#### 7. カイロ (エジプト北部・昭和63・12月

調査)

ピラミットと名付けられているものはメキシコとエジプトとにある、前者は天然の丘陵をピラミット型にけずり変えたものであり、後者は平地に石材を整然と積み上げたものである。従って、後者の棺室は地平線下に位置するのでこの奥室に立入った所感は誠に格別のものであると言えよう。尚この度の旅行ではピラミットの夜間照明を背景にして音楽の夕を楽しみえて他所に得難いインスピレーションを受けた。

#### 8. フィリッパ島 (オーストラリア南東部・昭和61・10月調査)

この地は小型の通称コビトペンギンの繁殖地であり、殊に8月の育雛期を目当てとし、夕刻から日没に亘って観察客に呼びかけている。地形は外洋にめんした傾斜面の砂丘を営巣地とし、海面より5~100米余の高さにおよぶ幾條かのペンギン道路があり、親ペンギンは日中捕らえた雛への餌(魚類)を消化管に充満し、わがひな等の呼声と体臭をたよりに帰巢する。この何千羽のペンギン行列が他国で見難い命の表現である。かようなペンギン生態観察者は1夜に50~300人余に達しており、そのために当局は観察台をペンギン通路に最小限の支障にとどめたいと、願っている様を見て感慨深いものがあつた。

当地には別に「コアラの森」の案内があつた、この地は道路に隣接したユーカリ林であつた、コアラは本来が半夜行性の臆病動物であり、その上に群居性に乏しいところから、車の騒音の高い、かかる地帯では不向であると言える。

#### 9. ワイトモ鍾乳洞窟 (ニュージーランド北部・昭和61・10月調査)

鍾乳洞として小規模の洞窟であるが、ここの天井に棲息する数千匹のGlow-Worm (通称ツチボタル) の排出する20cm程の糸状物が暗所で蛍光を発して、さながら、天井よりつりさげた幾多の蛍光スダレの異観を呈するのである。この鍾乳洞は手押の木造舟で観客を誘導している静かな洞窟でこのツチボタルは蛍光糸状体に集まる小昆虫を餌として生活し、天敵類即ちコウモリ・トカゲ・クモ類が現に見られないのは物怪の幸であるにせよ今後の管理には気を抜けないポイントと言える。

#### 10. ボロブドール寺跡(インドネシア中部・昭和63・7月調査)

ヒンズー教8世紀の遺跡として貴重なものであったが、建築礎材の不備によって崩壊の危機にあったところ、1,907年~1,911年に亘ってユネスコの特別援助により、ようやく全容の存立をえている。この素材石は多孔性軟弱であるのを見て修築に要する労費を推察できる。現在は廃寺となっているので周辺部の環境整備と、一般来観者のために安直な案内書が是非とも必要である。

#### 11. バリ島(インドネシア東南部・昭和63・7月調査)

この国のリゾート代表地と呼んでいるが他国の出資によって対面を全うしているところもあって複雑環境と言える。まず造園にはヤシ類を主体とするが密度が低いので野鳥類も少ない。海の珊瑚礁から運ばれ更に磯波で研磨された珊瑚海砂は実に見事なできばえである。なお、夜間呼びものに所謂、雨乞の名残りの行事が森で開かれ、南国の民族気質が豊かで印象深い。

#### 12. 龍門石窟(中国東南部・昭和60・4月調査)

中国にはおよそ大陸的且世紀的の開発がうかがわれるが、茲もその実績の一例と言える。現地は川辺に続いて築かれた自然岩壁を素材として、大小取りまぜ幾千の彫像であり、少くとも完成に幾拾年の才月を要している。現に幾世紀を過ぎ乍ら、もし大洪水に遭遇せんかこのデリケートな石のみの刃跡は言うに及ばず大岩壁も崩解からまぬがれえない。

尚、台湾東南部のタロコ渓谷を見て、(昭和62・4月調査) その地質が大理石であって、組成が緻密強固であるのでただちに崩解し難くまさに安定した峡谷を現出している。

## II 宮崎県のリゾート開発現場への提言

### 1. 一ツ葉海岸地区

秋の日暮れ浜の砂丘に立ち西方を望めば緑の地平線上に沈む紅の太陽を見る。このような雄大な風景は100キロ余も続く日向灘の沿岸であり、この一角が白砂青松の一ツ葉海岸であって、浜辺にはハマボウで縁取ったクロマツ林が延々と続いている。颱風の頃は太平洋の深海性のミズウオ、タカアシガニ、オキノテズルモズル等が浜辺に打上げられると共に迷いものとして、アシカ、グンカンドリ、南方海域のウミヘビ類が捕らえられている。尚この浜は古くからアカウミガメの産卵地として、夏期300~500頭(1976~'88調査)に達しているため、特別の保護策を宮崎市と宮崎県野性動物研究会が実施している。

当地の開発は既にシイサイド、フェニックス並びにフェニックス動物園による実績があると言うが今後、海浜の砂丘並びに汀線の変更にまで及ぶ場合にはウミガメの汀に接近しうる誘導路と更に、安心して産卵可能の砂丘を新設し、茲をウミガメの産卵行動の見守り

と孵化後の子ガメを安全に海へ見送れる舞台とならしめたいものである。

## 2. 青島地区

青島の総合調査は1,944年に筆者が調査委員長として行った。動物810種、植物456種を発表した。冬季浜辺はカモ類で取りかこまれ、夏季には台風の中でも、ササゴイの声が鳴きわたっている。植生の主体はピロウ樹4,500本余であるが地表はシャリンバイ、アオノクマタケラン、クワズイモ、ハマオモト等で喬木の根株を被うている。さて、この安定した植生を見るたびに、かつての島横断道の開発問題が思い出される。それは戦後、漸く国内観光の気運が盛りあがらんとした頃であった。或る当地観光団体の幹部から青島神社拝殿より北方中央道路の開設を申出で、これによって島巡りの時間短縮を図らんと強引に押込んできたのであった。当時、筆者は宮崎県天然記念物保護委員であったので、只管に、冬季の寒風が島内への進入を防止するための観念に立ち絶対反対で根強く説得に当たった顛末である。

## 3. 鶴戸地区

国内に神社と名を負う建造物は多いが、本神宮のように大鳥居をくぐって、次第に下降し、遂には海辺の岩窟に達して、茲で本尊を拝する類いは至って少ない。従って潮風、颱風の当たりが強く、樹木類は相互に寄り合い助け合って生き抜いてきた。かくして現にヘゴ、ギョボクの珍木やシャリンバイ、スギ巨木等の存在を見る。しかし、茲にも新時代の別な荒風が吹かんとしている現状であって、これは当境内で、駐車場の新設問題である。まず、広場の設定には樹木の伐採を最小限とし、通路は直通を避けて、荒風の通り抜けを

防止したい、殊に、ギョボク、スギの巨木等の名木に接近する道路の開設は絶対に避けるべきである。

## あとがき

リゾート開発の現場・宮崎県に居て、生物の保全をいかにすべきかと思ひめぐらせて留るところが無い。依って、茲に括めて提言とする。

- (1) 生物にはそれぞれ小環境適応に遅速があるにせよ対策は迅速に実施すべきである。
- (2) 一度滅亡した生物の種は自今永久にこの地上に出現することの無いのが生物学の鉄則である。
- (3) リゾート開発には民族的特徴を十分に盛りこむ余裕があつてほしい。
- (4) リゾート開発地区の生物生活を抑制されるもの等には積極的な生活促進並びに保護手段を付帯実施せしめる。

(DEC. 29-1988. 摺筆)

## 著者略歴

氏名：Shigeru Nakajima

学歴：上田蚕糸専門学校養蚕科卒業

東京帝国大学農学部研修（動物学）

農学博士（東京帝国大学）

職歴：昭和2年・宮崎高等農林学校助教授

昭和18年・宮崎高等農林学校教授

昭和25年・宮崎大学教授（農学部）

昭和37年・学芸員（宮崎大学農業博物館館長兼任）

昭和40年・宮崎大学農学部部長（2期）

昭和45年・宮崎大学停年退官

昭和45年・宮崎大学名誉教授

昭和45年・西南女学院短期大学学長（2期）

著書：暖地の動物学（昭和23年）

賞：宮崎県文化賞（昭和41年）

叙勲：勲三等旭日中授賞（昭和50年）

研究論文等

昭和11年・日向に於ける特殊動物（日向の自然と生物，中に掲載）

昭和17年・麟翅目幼虫の吐糸管に関する研究（宮崎高等農林学校学術報告）

昭和29年・青島総合調査報告書（調査委員長）

昭和33年・上日向の動物（祖母・傾，中に掲載）

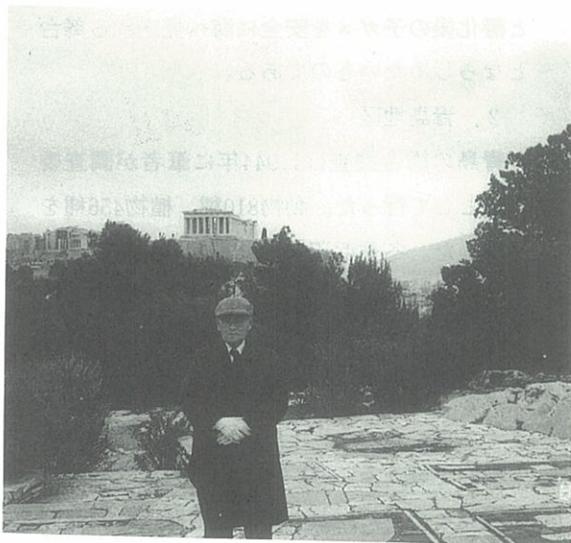
昭和44年・霧島山総合調査報告書（霧島山総合研究会長）

委員等

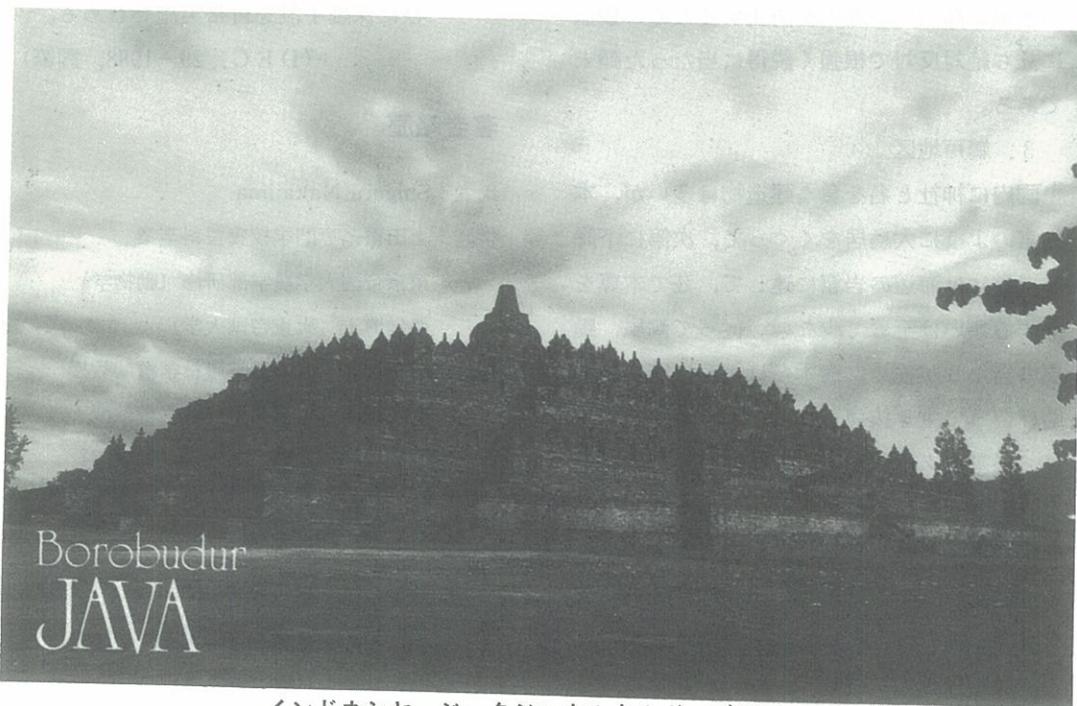
宮崎野性動物研究会会長（昭和51年以来現在）

宮崎県自然環境保全審議会委員（昭和58年以来）

宮崎県自然環境保全審議会会長（昭和62年以来現在）



ギリシャ…アテネのアクロポリス神殿の筆者



インドネシア…ジョクジャカルタのボロブドール寺